

競技力向上を目指した水球チームにおける チームメイトの難聴選手に対する意識変容過程

齊藤 葵 (筑波大学)

1. 目的

本研究の目的は、難聴の選手が水球選手としてチームにどのように溶け込んだのか、その過程をチームメイトに着目して明らかにすることである。

2. 方法

1) 対象者

対象者は、全国大会で常に上位入賞をしている S 高校卒業生 4 名 (対象者 A, B, C, D) とした。

2) 調査方法

調査者ごとに約 30 分の半構造化面接を実施した。

3) 分析方法

本人の同意を得て録音記録し、逐次文字化したものを一文ごとに 1 つのデータとした。次に、調査項目に対する 4 者の回答を比較し、同じような意味の名詞及び名詞の文字列に関するキーワードで分類した。

3. 結果と考察

1) 難聴に対する認識と意識の変化

障がい者に対する意識変容¹⁾をもとに、否定、肯定、対等、尊敬の意識変容段階を設定したところ、対象者 A, B, C において変化が見られた。難聴という障害を認識する前は尊敬又は対等であった見方が、難聴を認識した後には肯定に変化した。つまり、一人の水球選手としての見方から、難聴の水球選手としての見方が強まっていることが伺える。

2) 難聴に対する認識と行動の変化

対象者 A, B, C, D の難聴に対する認識と行動の変化は、対象者 A, B, C においては見られなかったが、対象者 D においては見られた。それらは、自身の行動の変化として、座る位置、よく見る、自分の判断でカバー、復唱の 4 つであった。つまり、対象者 D は、自身の難聴による不便さを、プレー中に顔を上げること、そしてよく見ること、さらにはこれらを含

めた競技力で補填していることが明らかになった。

3) 水球をするうえでの難聴の捉え方

対象者 D の聞こえにくさに対する回答は、監督の声、右サイドに行った時、キーパー等の指示、プールの中が 1 件ずつであった。また、対象者 A, B, C の対象者 D の聞こえにくさに対する対処法は、プレーが止まってから言うが 1 件、聞こえるまで大きな声で言うが 2 件だった。つまり、対象者 D はプレー中にチームメイトと監督の声が聞こえにくく、チームメイトは対処するためにいくつかの方法をとっていることが明らかになった。

4) 対象者 D の競技力に対する認識

対象者 A, B, C が考える対象者 D のチームにおける存在・役割が点を取る、エースで一致した。また、対象者 D 自身も自分のチームにおける役割・存在を理解しており、これをプレーで着実に遂行することによってエースとしての存在を認められていたと考えられる。

4. 結論

本研究では、難聴の水球選手が水球選手としてチームにどのような過程で溶け込んだのかを、チームメイトに着目して明らかにした。その結果、チームメイトの難聴選手に対する意識変容過程は、難聴選手が難聴であることを認識する前後で変化することが明らかになった。また、チームメイトの意識変容には、難聴選手の競技力及びチームにおける役割が大きく関係することが明らかになった。よって、チームメイトが考える難聴選手のチームにおける役割と、難聴選手が考える自身の役割が一致し、それを遂行する競技力を有していれば、難聴選手は集団に溶け込みやすくなる可能性が高いことが示唆された。

5. 主な参考文献

1) 草野勝彦・長宗我部博, インクルーシブ体育の創造, 市村出版, 2007